

## 『資本論』 第1部 資本の生産過程

<要約:紅林進>

### 第7篇 資本の蓄積過程

#### 第23章 資本主義的蓄積の一般的法則

##### 第1節 資本構成の不変な場合に蓄積に伴う労働力需要の増加

**資本の構成:** 機械や原料などの生産手段の価値である不変資本と、労働力である可変資本からなる資本において、この不変資本と可変資本の組み合わせ。

**資本の価値構成:** 資本が不変資本と可変資本に分割されている量的比率で規定される。資本が100のとき、不変資本に80、可変資本に20を投資したときの価値構成は4対1。

**資本の技術的構成:** 生産過程で機能している素材の面から、「充用されている生産手段の総量」と「その充用に必要な労働量」との比率によって規定される。

**資本の有機的構成:** 資本の価値構成と資本お技術的構成をまとめた概念で、資本の技術的構成によって規定され、技術的構成の変化を反映する限りでの資本の価値構成。単に資本の価値構成という場合には、この資本の有機的構成をさす。

##### 第2節 蓄積とそれに伴い集積との進行途上での可変資本の相対的減少

18世紀から19世紀への紡績業における例を挙げて、資本構成の変化、それに伴う労働者の雇用の変化を取り上げている。

18世紀: 不変資本50、可変資本50  
19世紀: 不変資本87.5、可変資本12.5

資本の規模が4倍に増えてはじめて、18世紀と同じ数の労働者が雇用できる。資本が高度化したとき、可変資本が減るよりも生産規模が大きくなっていかないと労働者ははじき出される。

**資本の集積:** 資本の蓄積と拡大再生産に基づく生産手段の集積。

**資本の集中:** 存在している資本がより大きい資本に吸収されたり、小さな資本が集まって大きな資本になること。

##### 第3節 相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産

資本の蓄積が労働者に及ぼす影響の中の雇用の変動を取り上げている。

生産諸手段が増大→それに対応するためにより多くの労働者を雇用→雇用増

新技術の導入により、より少ない労働者で大きな生産性をあげようとする→雇用減

**産業予備軍:** 資本の変転する増殖欲求のために、現実的人口増加の制限にかかわらずいつでも使える搾取可能な人間材料。

剰労働人口

再形成

再生産

吸収

## 第4節 相対的過剰人口の種々の存在形態 資本主義的蓄積の一般的法則

### 相対的過剰人口の4つの形態

**流動的過剰人口**: 未成年男子労働者が中心で、青年になると解雇される労働者たち。中年の労働者もいるが、老衰し低い等級に落とされた人々で、労働者世帯の急速な交代が見られる。

**潜在的過剰人口**: 流動的過剰人口より悪い条件で、労働者として都市に吸収されるのを待つ農村人口のこと。

**停滞的過剰人口**: 現役労働者の一部も含まれるが、就業している労働者の代わりをなす、不規則な就業をする労働者たちのこと。生活状態は労働者階級の平均的な標準水準以下に低下し、資本の独自の搾取部門の広大な基礎となっている。

**受救貧民**: 慈善事業的な援助で生活している貧民層。売春婦や浮浪者、犯罪者が含まれる。相対的過剰人口の最深の沈殿物。

資本が蓄積されるにつれて、労働者の報酬がどうであろうと(高かろうと低かろうと)、労働者の状態は悪化せざるをえない。

### 第5節 資本主義的蓄積の一般的法則の例解

資本主義的蓄積の一般的法則を実証するために a~f の実例を挙げて解説。

#### a 1846~1886年のイギリス

英国下院で当時のグラッドストーン首相は「1842年~1866年に、課税されうる所得は6%増加し、1853年~1861年に20%増加した」と述べが、この時期の公式統計では、受救貧民層は、1855年の85万1369人から、1856年には87万7767人、1865年には97万1433人に増加し、1866年の恐慌では、1865年に比べて19.5%増の受救貧民層を生み出したとマルクスは批判。食料が優先されるので、住居や高熱、衣料などはもっと不足しており、労働者層の生活全般は危機的状況にあった。

マルクスの指摘する、労働者の住宅状態悪化の理由

生産手段の集中が大量であればあるほど、それに応じて同じ空間おける労働者の密集も益々はなはだしく、従って資本主義的蓄積が急速であればあるほど、労働者の状態は益々悲惨になる。

#### b イギリスの工業労働者階級の低賃金層

当時の英国政府枢密院から委嘱された医師スミスの調査結果

失業している綿業労働者および5部門の都市労働者の栄養摂取量は「最低必要栄養摂取量」をすべて下回っていた。

#### c 移動民

・「移動民」とは、多くは農村出身者で、仕事があるときだけ雇われる労働者で、大部分が工業的な仕事に従事し、仕事場から仕事場を渡り歩く。

- ・彼らの施設は衛生管理が不十分で、天然痘、チフス、コレラなどの伝染病を招いた。
- ・鉱山労働者が住む小屋では、水の設備もトイレもなく、1つの部屋に10人以上が住み、小屋の家賃や水代は給料から天引きされ、給料は債務で赤字となり、逃げることもできない。

#### d 恐慌が労働者階級の最高給部分に及ぼす影響

1866年の恐慌が労働貴族にどのような影響を与えたかを考察。

この恐慌はロンドンの大銀行の破産に始まり、金融会社の倒産が相次ぎ、大量解雇によって失業者が街にあふれ、大銀行や大企業で働いていた労働貴族たちも失業し、極貧層になる者も多く出た。

ロンドン東部の労働者居住地区で極貧層が増大し、この地区の極貧人口の約2割が、半年ほど前には「最高賃金」を得ていた人々だった。

#### e イギリスの農業プロレタリアート

**農業プロレタリアート**: 自営で農業をしている人々ではなく、農業に従事する労働者。

イギリスの農業は穀物法の廃止によって変貌し、農業生産は自由競争の坩堝となり、機械化・大規模化が促進された。しかし農業労働者の労働価格は、生活費の増加に比例して増加せず、賃金は低下して、その結果、彼らの栄養状態、衛生状態、居住環境も悪化した。

当時の農村で生じていた「過疎化」はあくまで表面的な現象であって、都市部への農村からの人口流入は加速化していた。農村労働者は一部では過剰化、一部では過疎化していた。成人男性の割合は減り、婦人や児童が増えていた。

婦人と児童の、農業労働への強制引き入れと、そのことがもたらす青年男性労働者の過剰化・賃金引下げの悪循環がもたらされた。

その典型例がイングランド東部における「労働隊制度」である。

**労働隊制度**: 大借地農場経営者または地主の富のために存在し、その労働者数を標準的水準よりもはるかに少なく保ち、あらゆる臨時仕事用に臨時労働者を用意しておき、わずかの金でできるだけ多くの労働を絞り出した。

#### f アイルランド

当時のアイルランドは相次ぐ飢饉で餓死する者や、アメリカに移住する者が増え、人口減少が起きていた。→人口減少にとって、多くの土地が廃耕地になり、土地生産物は減少→人口減少のもとで、農業革命が進行→耕地を牧草地に変えて家畜を増やし、小規模農場が合併して大農場となって剰余生産物を増やす

→地主・農業資本家は地代と借地農業利潤が増大

→大衆は、人口減少にもかかわらず、農業革命によって新たに人口過剰となったため、賃金は下がり、農地は牧草地に変わり、男性労働を必要としないリンネル産業が発展し、成年男子の雇用は増えず、危機的な状態に置かれた。

## 第24章 いわゆる本源的蓄積

### 第1節 本源的蓄積の秘密

**本源的蓄積**: 資本主義的蓄積に先行する、資本主義的生産様式の結果ではなく、その出発点である蓄積。

## 資本が成立する条件

**第1の条件:**「生産諸手段および生活諸手段の所有者」(資本家)の存在。

**第2の条件:**「自らの意志で労働力を売る自由な労働者」(賃労働者)の存在。

**自由な労働者:**(封建時代の「農奴」のように、領主などの)誰かに身分的に隷属しているわけではないが、生産手段を失い、自分の労働力以外に売るものを持たない労働者。

この賃労働者の形成は、本源的蓄積の歴史において歴史的に画期的なもの。

本源的蓄積の歴史は国によって様々な違いがあるが、この章ではイギリスの場合を取り上げる。

## 第2節 農村住民からの土地の収奪

14～15世紀のイギリスの農村地帯:農奴制が解体され、大多数が自営農民で構成されていた。自分の農地と共同の用地を持っていた。

15世紀末～16世紀初頭の絶対王権の確立期:自営農民を土地から追い立てるとともに、共同用地を奪い取ったため、生産手段を失った多数のプロレタリアート(無産者)が発生した。

16世紀:カトリック教会の宗教改革に伴う教会領の再編によって、土地が奪取される。彼らは、旧来の世襲小作人を大量に追い払い、その経営地をひとまとめにして、それまで法律によって保障されていた貧困な農民の所有権を、暗黙のうちに没収した。

17世紀末:「ヨーマン」と呼ばれる独立農民や、農村労働者による共同使用地はまだ存在していた。

18世紀:「名誉革命」によって政治的支配の地位に着いた「地主および資本家的貨殖家たち」による、「国有地の盗奪」と「共同地の横奪」によって、独立農民や、農村労働者による共同使用地は完全に消滅した。

19世紀初頭:国家権力によって計画的な牧草地への転換のため、多くの土地が奪われる「土地の清掃」が行われた。

## 第3節 15世紀末以降の被収奪者に対する血の立法 労賃引き下げのための諸法律

農村で土地を奪われ、追い出された人々は都市に流れ込んだ。しかし仕事に就くことは難しく、浮浪者や盗賊、乞食になってしまう人々が続出した。

彼らを取り締まり、労働を強制するための「血の立法」が作られ、賃労働者になるために必要な訓練を強制した。

### 「血の立法」

1530年:乞食となると鑑札がつけられ、浮浪者は鞭打ちと禁固処分の後、帰郷させられ強制労働をさせられた。

1547年:労働を拒否した者を告発者の奴隷にする法律。

1572年:鑑札を持たない乞食に焼印を押ししたり死刑にしたりする法律。

### 賃労働者の労賃に関する「血の立法」

1349年:「労働者規定法」で労働日の延長を強要。法定賃金を定め、それより高い賃金を払うことを禁止。

また同じころ、労働者が賃金を要求して団結することも禁止された。(これは、1871年まで続いたが、この法律に代わる1871年にできた条例でも、ストライキに対する厳しい罰則が定められていた。

#### 第4節 資本家的借地農業者の生成

農民から土地を奪った者→大土地所有者

大土地所有者から土地を借りて、大規模な農業経営を始めた者→農業資本家

「土地所有者」「借地農業経営者」「農業労働者」という関係が生まれる。

##### 「借地農業経営者」が「農業資本家」となった契機

- ・農業革命: 15世紀後半から16世紀全体にわたって続いた農業革命によって、借地農業者が富を手にした。
- ・貨幣の減価: 16世紀に貴金属の価値が低下したことにより、労賃も低下し、労賃の一部が借地農業利潤に加えられた。当時は借地契約が長期だったため、支払わねばならない地代は旧来の貨幣価値で契約されていたので、借地農業者は、労働者と土地所有者の双方から富を得た。

#### 第5節 農業革命の工業への反作用 産業資本のための国内市場の形成

農業と工業の関係

自営農民のように自家生産できない農村労働者の出現は、食料・農産物を農業資本家から、衣類などの生活手段を産業資本から買わなければならなくなる。

↓

借地農業者が経営する農業と産業資本家が経営するマニュファクチュアは、相互に市場を見出した。

↓

農業から追い立てられた人々は賃金労働者となり、借地農業者の下で農業労働者となるか、そこにできたリンネル紡績工場などで働くようになる。しかしまだこの段階では、農村が産業資本のための国内市場を全面的に担うことはできない。

↓

大工業が、機械により、資本主義的農業の不変の基礎を与え、家内的・農村工業的根(紡績と織物)を引き抜いて、産業資本のための全国内市場を征服する。

#### 第6節 産業資本家の生成

##### 産業資本家出現の背景

- ・15世紀～16世紀のアメリカにおける金銀産地の発見
- ・先住民の絶滅と奴隷化、鉱山労働を強制
- ・東インドの征服と略奪の開始
- ・アフリカの商業的黒人狩猟場への転化
- ・ヨーロッパ諸国民の商業戦争

##### 本源的蓄積の契機となった国家的制度

- ・植民制度: 販売市場と市場独占によって強化された蓄積を保障し、ヨーロッパの外で略奪、奴隷化、強盗殺人によって獲得された財宝は、本国に還流し、そこで資本に転化。
- ・国債制度: 植民地の獲得と支配のために国債を発行。これが株式制度や銀行制度、近代的租税制度を発展させる契機となる。

・**近代的租税制度**: 農民や手工業者からの暴力的収奪を生んだ。

・**保護貿易制度**: 製造業者を製造し、独立した労働者を収奪し、国民の生産手段と生活手段を資本化した。

## 第7節 資本主義的蓄積の歴史的傾向

誰にも隷属しない自由な小経営が、資本主義を生み出す土壌となった。

**自分の労働に基づく個人的な私的所有**: 労働者が自分の生産手段を持ち、生産物は労働者のものとなる。

**資本主義的私的所有**: 労働者は働いても賃金をもらうだけで、労働の生産物は資本家のものとなる。

## 資本主義の未来

・生産職はより社会的に大規模になり、技術も発展する。

・土地の計画的利用や労働手段は資本家ではなく、共同体の成員のみが使うことになり、結合された社会的労働の生産手段として使用されることによる、あらゆる生産手段の節約、世界市場網への世界各国の組み入れ、それとともに、資本主義体制の国際的性格が発展する。

・貧困、隷従、搾取はさらに強まり、労働者階級だけでなく、人民大衆全体の利益との根本的対立も益々激しくなる。

資本主義的私有は、自己の労働に基づく個別的な私有の第一の否定である。しかし資本主義的生産は、一種の自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定は、私有を再興するのではないが、しかし確かに資本主義時代の成果を基礎とする、すなわち協同と土地および労働そのものによって生産された**生産手段の共有**とを基礎とする、**個別的私有**を作り出す。

## 第25章 近代植民理論

新大陸アメリカをはじめとする、自由人が移住して開拓した「処女地開拓」による植民と資本主義的蓄積、本源的蓄積との関係を経済学的に考察し、資本主義的生産様式と蓄積様式は、自己労働に基づく私的所有の破壊、すなわち労働者の収奪を条件としていることを確認。

資本家が、植民地に、貨幣、生産手段、生活手段を持ってくる。→しかし雇う労働者がいなければ、資本の活動はできない→賃労働者をヨーロッパの自分の工場から連れてゆく→しかし彼らも独立労働に転化してしまい、資本の活動はやはりできない

そこでイギリスの経済学者ウェイクフィールドが「組織的植民」を提唱。

**組織的植民**: 植民地の土地に人工的に高価格をつけ、移住者に賃労働以外の道を断ち、土地を売って得た資金で労働者を輸入し、植民地の資本家に提供するというウェイクフィールドの案。政府に採用されるが、大失敗に終わる。

土肥誠監修『面白いほどよくわかるマルクスの資本論』(日本文芸社)を基に作成